

[エッセイ No.16 初めての経験!]

2023年3月、久しぶりの九州。博多はびっくりするほど変貌していた。その地で生まれて初めての「講義」。その準備に、試行錯誤を繰り返しながら、ほとんど二か月を費やした。

福岡シンフォニーホールのステージは大きい。コンサートならもっと大きい場所も経験したが、ここで90分間休憩なしの「講義」?! でも「初めて」は怖いもの知らずなのだ。1800人、ホール一杯の「受講生」を前に一人で話を、という市民大学のお尋ね(オファー?!)を結構“気楽に”引き受けてしまったのだが、その実態の大変さを、まず家で喋りの時間を計ることで身をもって知った。

歌の長さならそれぞれ見当がついて、プログラムも組みやすいが、「おしゃべり」で90分?! ということは、その間マイクを握りっぱなしか?! ひとコマ90分の授業を仕事とする大学の先生たちや、他の講師の方たちに、心底敬意を覚えた。

実は最終的には、「演奏も入れてほしい」との主催者からのご要望により、テーマに沿って歌も何曲か聴いていただくことになった。だが、それはそれで、また他の難しい問題が出てきてしまった。

私のテーマは、「言葉を届ける、メロディを届ける、心を届ける」。コンサートの聴衆とは違う「受講生」に、音楽や歌の楽しさを分かっていただけのように、親しんでいただけのように、様々なジャンルから曲を選んだ。ということは、クラシック的なものあり、まったく異なる分野の歌あり、つまり、マイクが必要でない歌と必要な歌が混在することになった。「オハナシ」に関して言えば、もちろんマイクなしでは無理。

人間の聴覚とは不思議なもので、初めはクラシックコンサートの「ナマ音」が小さく感じても、「会場の音」に慣れていく。オーケストラが鳴り響くオペラでは、歌手のすべての音をホールではっきり聞き取ることは不可能なのだが、CDと同じ音量の声を期待している人たちは、「音量が足りない」と感じてしまうかもしれない。でもオケの人数対一人、二人のナマ声、全部聞えなくて当たり前。それでもそのうち、「音楽の世界」に身を浸して、全体の響きを楽しめるようになる。

また、会場でマイクを通した音をずっと耳にしていると、突然のマイクなしの音はものすごく小さく聞こえる。とは言え、喋りマイクの音量を、できるだけ自然に、ナマ音の歌に合わせるのは、特に大きなホールでは無理だ。そして今回の「講座」は、話の合間合間に歌が入る形…。

悩みに悩んで、結局全ての歌をマイク持ちでやることにした。あとは音響のスタッフの調整力を信頼するばかり! それに、今回の講座は(受講生の人数の関係で、)2時間の休憩をはさんで、続けて2回行わなければならない、(特にナマ音への)エネ

ルギーの配分が難しかった。年齢ももうそれほど若くないし！
というところで、今回のプログラムについて、少し記してみたい。
(ちょっとびっくりしたのは、照明スタッフが「講義」をショーステージのように作ってくださったこと。本番まで全然知りませんでした！)

日本では「宝塚の歌」として知られている「すみれの花咲くころ」。実はドイツのオペラ座レヴュー生まれ。原題の「白いライラックの花が咲くころ」になると、1953年に作られた同名の映画が、今でもテレビで放映されるほど、ドイツ語圏では愛されている。ちなみに、主人公が歌う場面の「影歌」は、ヘルマン・プライというドイツの世界的なバリトン歌手だった。私の CD 録音の折たまたま日本にいた彼は、スタジオにも顔を出してくれて、「これ、僕が映画で歌ったんだよ！」と自慢していたっけ。

歌の起源やオペラと歌曲の違い、日本で初めて洋楽の「歌」が作られたころの話、「花嫁人形」では、友人から聞いた、戦争にまつわる花嫁人形の靖国神社に関するエピソードを語った。そして大好きな「島原の子守唄」。

私自身の歌の原点は、幼いころ母が毎晩枕もとで歌ってくれた様々な歌だが、浩宮さま、現天皇陛下も毎晩、お母様、上皇后陛下美智子さまの作られた子守歌で眠りにつかれていたという。

その「おもひ子」の地を、前日訪れた。作詩の宮崎湖処子氏の生地である。甘木公園には楽譜も刻まれた石碑があり、後ろに植えられた大きな楠の樹の枝と葉が、陽光にそよいでいた。

そして、「星の王子様」を初めて日本語に訳した、内藤濯氏とのご交流から生まれた「星の王子の…」という美智子さまのお歌。20代の美智子様と80歳に近かった内藤氏は文通もされ、美智子さまからのお手紙は、長いこと銀行の貸し金庫に保管されていたとか。それをなんと、濯氏の息子の初穂氏が、「海苔の四角い空き缶に入れて」美智子さまのお手元に戻してしまった…。交わされた多くの文(フミ)の中で、お二人はいったいどんなお話をされたのだろうか。この日は、童話「星の王子様」も少し朗読させていただきました。

音楽の持つ役割を示したドイツの流行歌、「リリー・マルレーン」。ドイツ語で聴いていただいたが、第2次世界大戦後に初めてコンサートホールで歌われた時には、会場を埋め尽くした様々な国の聴衆が、自分たちの言葉で一斉に歌ったそうだ。

「枯葉」では、シャンソン界で活躍するピアニストの「伴奏」をたっぷり聴いていただいた。(ちなみにこの曲はその昔、TV 番組で歌った私をミソメてくださった、ポップス界の大御所作曲家の方との出会いとなった。浜口庫之助さん、優しい素敵なお方だった。)

そして、昨年録音させていただいたひばりさんの CD から3曲。何回かのステージを経て、やっと少しずつ曲が、“本当に”自分の手の中に入ってきた感がある。

曲間をずっと「講義」で繋ぎながら、最後は久しぶりに歌った「マイ・ウェイ」だった。実は「本当の最後」は、会場の方たちと一緒に「故郷」だったのだけれど、主催者の方たちが(コロナ対策の)大事を取られて、「受講生はマスクと心の中だけで歌う」ということになってしまった。残念！（でも、結構“ちゃんと”声で歌われた方たちもいらした。）

一回目が終わったあとの2時間の休憩は、完全な「喉休め」、大谷選手ばりの「体休め」。だって、2回続きも全く初めての経験。2回目の最後の「マイ・ウェイ」まで、どうやって声が持つかどうか(本音を言うと！)少し不安だった。

翌日の帰京の新幹線内では、見事に気が抜けてしまったが、それでもこの福岡は、本当に貴重な経験だった。研究者でも学者でもない、また何か特別な方向を究めているわけでもない自分にできること、また音楽家として課せられた将来への課題、どうしたら「音楽の喜び」を伝えられるか、などなど、次へ向かって「自分の分野」を考えられる指針となったような気がする。

久しぶりの懐かしい友人たちにも会えたり、本当に実り多き初体験の日々でした。市民大学の皆様、ありがとうございました！